

## 『現象と秩序』記念すべき第20号へ向けて

松繁 卓哉 (国立保健医療科学院)

### 1 はじめに

このたび、『現象と秩序』のこれまでの掲載論文を振り返り、文章としてまとめる機会をいただいた。特に、第11号から第19号を中心に掲載論文を振り返って同誌の貢献や特徴等について考えてみたい。

第11号の発行は2019年10月であり、本稿執筆時点での最新号の第19号は2023年10月の発行である。この期間は、奇しくも「コロナ前」と呼ばれる2019年12月以前の時期に始まり、新型コロナウイルスが世界的な感染拡大期を経て、やがて日本においては2023年5月に5類感染症という位置づけに代わり、「アフターコロナ」と称されるようになった時期と重なる。このことは、後述するように、この時期の『現象と秩序』の掲載論文の特徴を考える上で大きな意味を持っている。

2020年10月発行の第13号の編集後記に以下のような記述がある。

このコロナ禍の時代に、人文・社会科学は何ができるのでしょうか。この問いに有効に答える論文に第一論文(加戸論文)はなっていると思います。ウイルスという、私たち人間を寄生対象として必要としながら、その一方で苦しめる存在は、その寄生という側面に注目するならば、人間と環境の共生メカニズムの一部にすぎません。したがって、共生でありながらも宿主(の一部)を殺害する存在であるというこの理不尽さには、既視感があります。(中略)人文社会科学の論考は、それを読んだからといって問題が解決する訳ではありませんが、理解はできるようになります。理解すれば受入れが可能になります。ここに、人文社会科学の価値があるのでしょうか。(第13号, p.93)

「コロナ禍」と称される期間に、人文社会科学分野の研究者は上記のような問い、すなわち、パンデミックのような社会の危機的状況において人文社会科学は何ができるのかという問いに向き合うことになった。もちろん、それ以前においても、人文社会科学の価値は人々によって追究されたわけであるが、2020年以降には、一段ステップを上げたような緊張感で、この問いが取り上げられてきたと言ってよいだろう。ステップを一段上げて、と言っているのは、それほどに公衆衛生的な感染拡大コントロールの正当性が最優先課題となり、人々の多面的・複合的な「生きづらさ」の問題が後景化する中で、人文社会科学の存在意義を表明することが同分野の研究者らに突き付けられている、という認識によるものである。そこで本稿では、まず次節において『現象と秩序』の直近3年ほどの歩みについて、上記の問題関心、すなわち人文社会科学の今日的意義という点を中心にレビュー

してみたい。続く第3節では、この学術誌の特徴の一つである、多様なコンテンツの「ブレンドの妙」について述べてみたい。後述するように、一見すると同じ号に異質な論考が組み合わされているのであるが、読み進めていくうちに読者はコミュニケーション研究の深奥へといざなわれるのである。

## 2 変転する社会における人文社会科学の存在意義とは

さて、上述の第13号の加戸論文（加戸友佳子「アトピー性皮膚炎における身体境界の『掻破』」）では、その締めくくりに際して以下のような記述がある。

パンデミックの渦中で気付くことは、実際の身体が完全な個別化と統制のもとにある、という考え方が十分に機能しなくなっていることである。（中略）人間の身体とその環境との関係を捉え直し、閉じられた個別性のもとにある身体観を変えうる考え方を模索する必要は、より高まっている。（中略）掻破行動は、現代において前提とされているさまざまな境界を乱し、同時に確立する行為としての意味を持ちうる。それは、ウイルスの伝播という自然・社会現象の中で、物理的・地理的・知的境界を作り直す必要がある「ポスト・コロナ」における社会を考えるときに、有益な材料となるものであろう。（第13号，pp.12-13）

ここで加戸は「境界」という言葉を用いて、もの・場所・人と人、そして人の「知」と「知」の間の在り方が根底から覆されることとなった今日の社会を、いま一度とらえ直す手立てとして人文社会科学の意義を示している。この第13号に先立って、すでに第12号において、新型コロナウイルスの感染拡大が先々引き起こすかもしれない社会状況の変化に対する危機意識が、同誌編集委員会の中で萌芽している。以下は第12号編集後記の中の記述である。

ところで、本誌編集作業中に新型コロナウイルスの感染が拡大し、世界的に未曾有の事態となりました。グローバルなモビリティの時代である現代、人間・モノ・資本・情報だけではなくウイルスも人間を“乗り物”として移動しているのだと痛感させられます。高齢者などが重症化する傾向にあると言われるなか、「集団免疫」という選択肢にはどうも違和感を覚えます。死者が〇万人で抑えられればいい方だという物言いに対しても同様です。“人為的に”淘汰される人がいることについての想像力は、「正しく恐れる」（寺田寅彦）ことの必要性が叫ばれる現在、あらためて持ち備えて、あるいは鍛えていきたいものです。（第12号，p.73）

感染拡大後、それほど間もない2020年初頭の段階で、危機管理の混沌の中で「淘汰」される側の人々に危機意識を表明しているところは、今から振り返っても、非常に高感度の

洞察であることに驚かされる。そして、この編集後記においても先ほどの加戸論文と同様に、ヒトとモノが形成する関係性が以前の社会におけるそれとは異なる様相を呈している。「今」、感染拡大状況に目を奪われてしまう我々に、冷徹な思考の重要性を呼び起こしている。

筆者は長年、保健医療の研究機関に所属し、多くの医療系の研究者に囲まれた社会学者としてすごしてきた。そうした中で、医療系・自然科学系の研究と人文社会系の研究との間の文化の相違に直面する経験を重ねてきた。こうした経験を経た今、『現象と秩序』の問題提起に共鳴するところが少なからずある。まず、分野間で研究の「新奇性」に対する感覚の相違があるように感じてきた。医学系・生物学系の研究知見においては、先行研究で既に語られてきた内容に対する忌避感が根強いと筆者は少なからず感じる。もちろん、人文社会科学において新奇性の意識が無いということではない。しかし、マルクス、ヴェーバー、デュルケムほか、社会科学の古典に何度も何度も立ち返り、解釈を点検するトレーニングを大学院生の期間に受けてきた人文社会科学の人々が捉える「新奇性」と、医学・疫学の研究に従事する人々のそれとは、成り立ちに違いがあるように感じてきた。

なぜこのようなことを述べたかという点、疫学や公衆衛生の研究の最前線では、「今まで見えていなかったこと」について、最新の手法・技術を用いることで可視化することが一つの至上命題となっていることを確認しておこうと考えたからである。このような学問特性により、疫学・公衆衛生研究は、結果として「新型コロナウイルス」という未知の存在が人類に何を及ぼしているのか（身体に顕在するインパクトの解明・視覚化）という点に着眼することとなる。一方、人間関係の学問と称される社会学は、未知のウイルスが「人間と人間の関係性」に及ぼす影響（社会関係に潜在するインパクトの探索・理論化）に目を向ける。見えざる事象を「見て」、想像力を働かせ、社会関係・社会構造を理論化していく社会学ならではの「まなざし」がここで発揮されるのである。こうしたことから、これら異分野の領域間で齟齬のようなものが生まれるのではないかと。第12号編集後記が「淘汰される人」の問題提起をしていることは、社会学の原初的立ち位置から、この時期だからこそ軸足を外すことなく、また、「最新の」フレーム・「最新の」スキームなどに振り回されることなく、探求の目を持ち続けていこうとするスタンスをうかがわせる。

同様の冷徹な社会学的視座が貫かれているのが、第13号の檜田論文（檜田美雄「人権社会学としての『〈当事者宣言〉の社会学』」）である。パンデミックを取り扱っているわけではないが、私達は同論文における「人権」の扱いを見ていく中で、時間と空間の様相の変化において「人権」なるものが変転を繰り返す状況を著者の檜田が深くまなざしていることを知ることとなる。同論文に以下のような記述がある。

つまりは、「人権社会学」的思考をすることで、「人権」を充実させたり、「人権」の抑圧性を自覚しやすくなったりすることがある、ということである。アメリカ社会学会の「人権社会学セクション」の主張に引きつけてこの部分を解説するのなら、「人権

の歴史や制度や言説や未来についての社会的、政治的、文化的、比較的な成り立ちを理解する」態度を取るということは、つまり「人権」を天賦の普遍的なものとは考えずに、社会学的な多様な存在として扱うということである。(第13号, p.72)

この場合の「人権」を「感染対策」に置き換えてみても、非常に重要な示唆があるように私は感じる。ペストやスペイン風邪の歴史を振り返り、そして現在の新型コロナウイルスの状況を見たときに、何が「感染対策」の「正しさ」であるのかについて、人々は「正答」を持っていない。「持ってない」のではなく、唯一の正答がないというべきであろう。上記の檜田の記述になぞらえて言えば、「感染対策」を天賦の普遍的なものとは考えずに、多様な存在として扱うことが、人文社会科学には可能なのである。

だが、このような視座を冷静に打ち立てることは、パンデミックの混乱の只中では容易なことではない。日々、テレビやネットにおいて、日本地図の都道府県の中に数値が書き込まれ色分けされた「感染状況」の「情報伝達」に取り囲まれた私達にとって、感染の数的拡大を相対的に受け取る視点を確保することは困難を伴った。しかしながら、同誌の記述のところどころに、そうした社会学的想像力のエッセンスがちりばめられており、「コロナ渦」の期間に、貴重な発信がなされてきたことを知ることができるのである。

### 3 ブレンドの妙

ここにたいへん興味深い実践報告の掲載がある。2022年10月刊行の第17号に掲載された櫻井論文(櫻井庸子「社会学者、ブレインアタックに遭遇——新たな知への開眼」)である。脳出血によって倒れた夫の治療期間中の様々な変遷について、リアリティの詳細な記述と、家族としての視点とを折り重ねながら綴っている秀逸な実践報告である。社会学者の夫の身に起きた出来事が、妻の視点、看護師の手書きメッセージ、本誌編集者の所感などにより、多視的に浮かび上がっている。

この実践報告が貴重であるのは、一連の出来事を丹念に記述しているからであり、かつ、コロナ禍に重なる時期の療養生活が、当事者らにいかなる経験をもたらしたのかという点について、詳しく知ることのできる資料となっているからである。筆者の櫻井は、夫が倒れる直前の時期に、夫の単身赴任先である鹿児島を訪れることを提案するも、2021年の感染拡大期に当たるこの時期は、県をまたいで行う移動の自粛ムードが強く、訪問を果たせなかった。その時のことを、以下のように記している。

ゴールデンウィークにも鹿児島行きを提案したが、断られた。コロナ感染患者数が増えてきたからである。断られても行けばよかったと後悔している。倒れる前日にも電話で話をした。全く変わった様子はなかった。が、事務的な話だったので、もっと体のことを気遣っていればと後悔し、自分を責めた。(第17号, p.69)

その後、夫は急性期病棟から回復期病棟へと移動するのだが、そのプロセスに対し、筆者の櫻井は困惑しており、以下の様に述べている。

急性期は約1ヵ月、回復期は最大約6ヵ月である。個々の患者の症状等はほとんど考慮されない。私の友人の脳外科医であるSは、「日本の医療制度は共産主義国家のそれと同じだ」と言っていた。確かにカレル・ヴァン・ウォルフレンは「日本は成功した社会主義国家である」と皮肉っていた。そして夫の病気を機に私達もこの人間を幸福にしない日本のシステムと向き合うことになった。(第17号, p.73)

やがて夫は、妻と自宅で療養生活に入るのだが、妻の櫻井は、夫は自分自身の現在の療養生活の状況を社会学者として見ていることを感じている。以下の記述が、それを物語る。

櫻井芳生は腹の底から社会学者だった、いや今もなお社会学者である!!私はそう思う。自分に起こった現実を「おもしろい!」と受け止めているのが私にはわかる。だから私も何も心配しないでいようと思う。(第17号, p.77)

コロナ禍の療養体験をつづった文章は、今日では数多く見ることが出来る。しかしながら、櫻井論文のように、ところどころに研究者視点から見た状況がつづられているものは、あまりない。そして、このような実践報告をも掲載対象として含めるところに『現象と秩序』ならではのアイデンティティがある。2014年10月刊行の記念すべき第1号の「創刊の辞」には次のように述べられている。

日本国内に人文科学・社会科学の学会機関誌や同人誌はたくさんありますが、上記の本誌の特徴の全てを兼ね備えた雑誌は珍しいと思われまます。したがって、本誌には本誌だけが達成できるシナジー効果(相乗効果)があると信じています。その効果を出すべく、毎号工夫をして、さまざまな種類の原稿を合わせて載せていくことができればよいと思っております。(第1号, p.1)

他誌にはなしえない人文社会科学が同時代を取り巻く諸事象を、『現象と秩序』は多面的かつ多次的に人々の前に提示する。櫻井の実践報告は、そのような同誌の存在意義を端的に表していると言える。

また、同誌のオリジナルな意義と貢献を別の言葉で言い表すとすれば、「ブレンドの妙」であるとも考えられる。創刊以来『現象と秩序』は、人々間のコミュニケーションに関して、特にマイクロレベルで展開される人と人のやりとりの機微に関して、鋭く学術的探究の目を向けてきた。そして、それら学術論文の取り合わせの絶妙さが、読者をコミュニケーションの深奥へと巧みにいざなうのである。

第18号を見てみよう。加戸らによる論文（加戸友佳子・檜田美雄・加藤美奈子「遠隔コミュニケーションにいかに対応するか？——Zoom上の買い物で行われていることについてのエスノメソドロジー」）では、ICT機器を用いた遠隔コミュニケーションにおける会話の様式・戦略・参与枠組について、たいへん興味深い知見を提示している。そして同じ第18号では、村中淑子による2つの論文（村中淑子『「諺 臍の宿替」における罵りの助動詞について——クサル・ヤガル・テケツカルを中心に」および「織田作之助『わが町』における罵りの助動詞について」）が掲載されている。後者の論文の中で村中は、小説家織田作之助の作品『わが町』に見られる大阪方言の罵りの助動詞に着眼し、人と人との間でやりとりされる罵りの言語表現に関して、興味深い知見を示している。

第一印象では、異色な取り合わせにも感じるこのこれらの論文であるが、読み進めると、近代から現代にいたるまで、人と人との間の会話において間主観的に取り交わされるシンボリックな挙措や表現がコミュニケーションを作動させていることを、それぞれの論文独自の視点から、我々に気づかせてくれる。このような学術誌がほかにあるだろうか。

#### 4 まとめ：『現象と秩序』その貢献

今回は、貴重な執筆の機会をいただき『現象と秩序』のあゆみと貢献を（とくに2019年10月刊行の第11号から2023年10月刊行の第19号の期間を中心に）考察した。

はじめに、この期間が「コロナ渦」と呼ばれる社会状況を含むことに関連して、パンデミックのように人間社会を変転させる状況において人文社会科学が有する役割・意義を同誌がどのように示してきたのかについて注目してきた。次に、『現象と秩序』が掲載してきたキャラクターの異なる論文が、その取り合わせの妙によって、読者をコミュニケーション研究の深奥へといざなう点へと着目した。

「雑誌」という言葉には、一見すると「種々雑多で盛りだくさん」なものを一定のねらいのもとに取り合わせ、人々に深い感銘を呼び起こす媒体であることを感じさせる。それは、同種のもを整然と並べた媒体とは異なり、人々をワクワクさせるのである。なぜなら、読者は、表面的には異質なものが渾然一体と溶け合う瞬間を味わうからであろう。こうした意味において『現象と秩序』は学術雑誌として大きな成功を収めている。様々な「現象」への探求の論考を取り合わせながら、そこに「秩序」を呼び起こしている。読者はこれからも、同誌の渾然の妙に惹きつけられていくだろう。

\*\*\*\*\*

【編集後記】『現象と秩序』第20号記念号をお届けします。第1号の刊行から9年半、準備期間を入れると、ほぼ丸10年になります。慣例により、総目次（発行順、著者名順）および、振り返り記事を掲載しました。振り返り記事の前半は堀田委員長が、後半は読者代表として松繁卓哉先生が書いて下さっています。どちらも力作ですし、一種の社会評論となっています。まずは、巻頭からお読み下さい。

本誌は「ハイブリッド」誌ですので、WEB上で容易にバックナンバーをご覧頂けます。本号の「総目次」を見ながら、気になった論文をザッピングしてみるのはいかがでしょうか（インターネット上では、カラー写真はカラーのまま掲載しています。きれいですよ）。

関連して、「ニュース」です。国立国会図書館は、2013年7月以降、インターネット上の逐次刊行物も法規に則って収集しており、その無料公開もしています（収集は「オンライン資料収集制度」として実施しており、公開は「国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）」内で行っています）。『現象と秩序』誌もすでに収集対象となっており、現在は、国立国会図書館の館内限り公開ですが、近日中に、無制限一般公開になる見込みです。本誌が公開に使っている@ニフティのサーバーが停止しても、こちらの国立国会図書館での公開の方は継続され続けますので、お心覚え頂ければ幸いです。

本号には、通常原稿も4篇が掲載されています。通訳が専門職として如何に高度なコミュニケーションを実践しているかを明らかにした飯田論文、落語の語りの比較研究の結果から「江戸の語り手はあくまでも俯瞰した立場をとるのに対し、上方の語り手は話の中にやや参与する姿勢がある」（かも）という不思議な特徴の発見に至りかかっている村中論文、精神障害者の居場所にかかわるモノグラフである遠部ほか論文、『走れメロス』の読解に社会学を積極導入しようとしている樫田論文、と今回も興味深い論文が集まりました。面白いと思った論文には、ご感想など頂戴できればうれしく思います。どうぞ今後も倍旧のご交誼を賜りますようお願い申し上げます。（Y.K.）

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2023年度） 編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）  
編集委員：樫田美雄（摂南大学）、中塚朋子（就実大学）、加戸友佳子（摂南大学）  
編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第20号 2024年 3月31日発行

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学 現代社会学部 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 072-800-5389 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848 ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>

\*\*\*\*\*